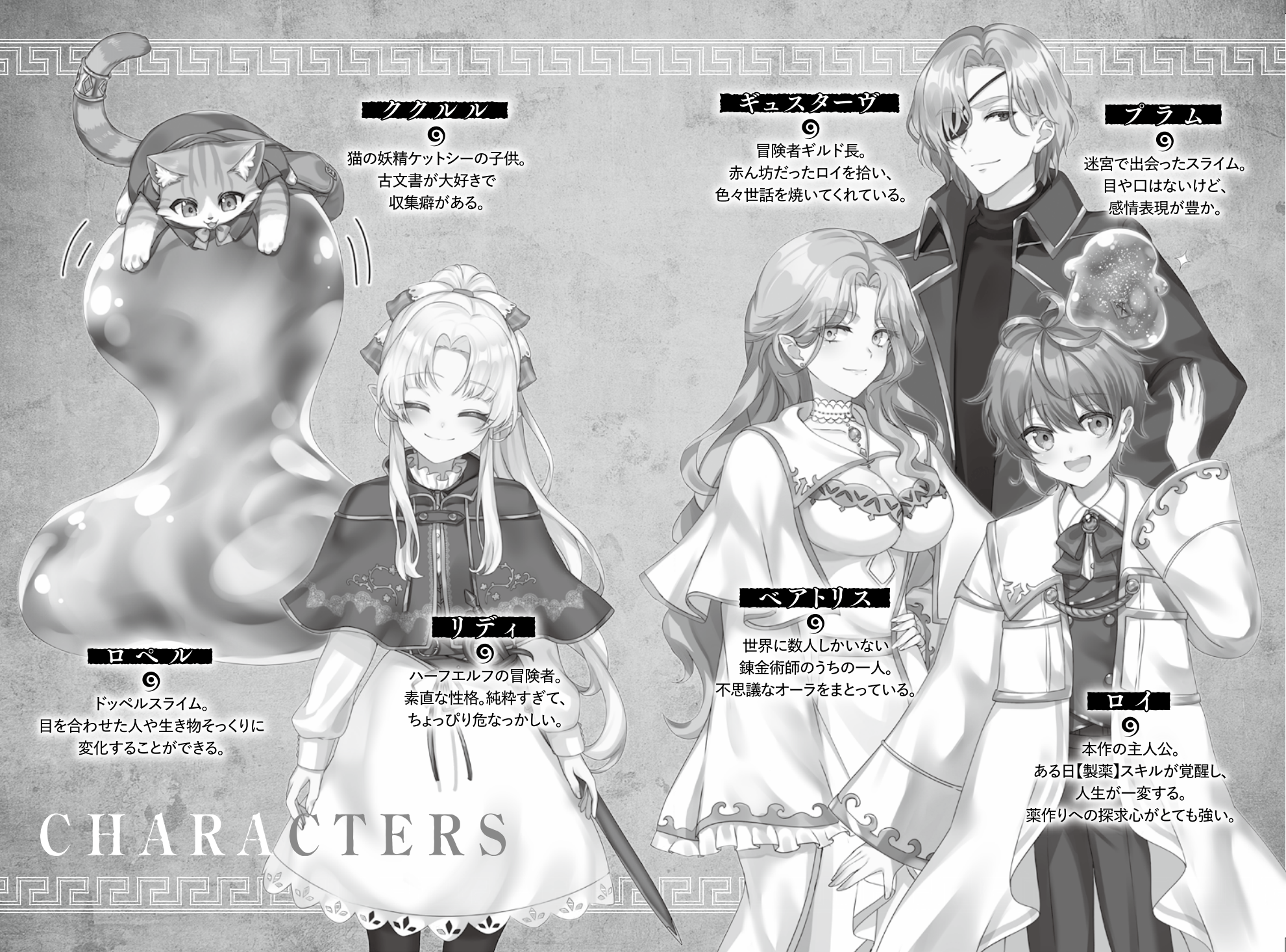
迷宮都市の錬金薬師

覚醒スキル【製薬】で今度こそ幸せに暮らします!

3

[著]
織部ソマリ
Oribe Somari

[ill.]
ガラスノ


CHARACTERS
ロペル
ドッペルスライム。
目を合わせた人や生き物そっくりに
変化することができる。
ククルル
猫の妖精ケットシーの子供。
古文書が大好きで
収集癖がある。
リディ
ハーフエルフの冒険者。
素直な性格。純粋すぎて、
ちょっぴり危なっかしい。
ギュスターヴ
冒険者ギルド長。
赤ん坊だったロイを拾い、
色々世話を焼いてくれている。
プラム
迷宮で出会ったスライム。
目や口はないけど、
感情表現が豊か。
ベアトリス
世界に数人しかいない
錬金術師のうちの一人。
不思議なオーラをまとっている。
ロイ
本作の主人公。
ある日【製薬】スキルが覚醒し、
人生が一変する。
薬作りへの探求心がとても強い。

第一章　新生活のはじまり

街の入り口が開くと同時に、迷宮都市ラブリュスの朝が賑やかに始まる。
「プラム、ロペル！　僕、パン屋さんに行ってくるね！」
僕――ロイは窓際で、品質の高い薬草が絶え間なく生えてくる錬金術製の魔道具、『永久薬草壁』に水をあげるスライムのプラムへ声を掛ける。
それと、僕の姿でキッチンに立つロペルにも声を掛けた。
ロペルはドッペルスライムという珍しい種類のスライムで、目を合わせた人や生き物そっくりに変化することができるんだ。
『うん！　ロイ、きをつけていってきてね～』
プラムは『プルル』と手（？）を振り、僕が持っている【友誼】というスキルの効果、《以心伝心》で言葉を伝えてくる。
「うん。まってる」
僕に変化しているロペルは、僕と同じ声だけどちょっと落ち着いた口調でそう言い、最新式の魔導コンロでスープ鍋を温める。
人に変化したロペルは、こうして言葉を喋ることができる。

僕以外の人間とも話せるので、お使いや店番なんかも任せられる。
「あ、ロペル、できたらソーセージも焼いてくれる？」
昨日、一緒に夕食を作って焼いて見せたから、人真似が上手なロペルならできると思うけど……どうだろう？
「できるとおもう」
「ありがとう！　じゃ、いってきまーす」
僕は財布を握りしめ、中庭を抜け、裏口から出ると細い路地を走っていった。
僕は迷宮都市ラブリュスの青銅級冒険者で、最近自分のお店を開くために奮闘中の錬金薬師だ。
そして僕が今住んでいるのは、これからオープン予定の『錬金薬師ロイの店』。
薬師通りにあるこの店は、元は僕の奉公先でもあったバスチア魔法薬店だった。
孤児である僕を弟子見習いにしてくれたのは、優しくて評判のいい薬師だった先代さんだ。
だけど先代さんが急死し、勘当されたはずの息子親子が跡を継ぎ、店は変わってしまった。
評判も薬師の腕もガタ落ちで、僕は見習いからただの奉公人に格下げ。奉公人仲間といつもお腹を空かせて働き詰めになった。
――でも、あの日から僕の人生は変わったんだ！
僕は左腕で輝く青銅色の腕輪を見て微笑む。冒険者登録をした新人冒険者はこの青銅色の腕輪をもらうことができる。
冒険者には青銅級、白銅級、銀級、黄金級、白金級と級位があって、青銅級が一番下。

十三歳の誕生日。僕は冒険者になって、通称ハズレと呼ばれる迷宮――『西の崖のハズレ』へ行った。
迷宮は、大昔、錬金術により栄えていた古王国が天変地異で沈み、できたものらしい。
王国一の迷宮都市、ラブリュスの中央には『地下迷宮城ラブリュス』がある。
浅層部、中層部、深層部と、深くなるにつれて魔素――魔力の素となる物質の濃度は高まり、出現する魔物が強くなる。しかも採取できる素材も増え、高品質になるんだ。
迷宮城は、未攻略の巨大な迷宮だ。
だが、西の崖のハズレは違う。
西の崖のハズレはとっくに攻略済みと思われていた小さな迷宮だったけど、最近、僕が新エリアを見つけた。
『ハズレ』と名が付く迷宮は、大部分が地上に露出しており魔素が薄い。出現する魔物は弱く、採取できる素材の品質もそれなりだ。
その代わり、冒険者登録前の子供でも入れるんだけどね。
ラブリュス近郊には、他にもいくつかハズレがあって、地下迷宮城ラブリュスからはぐれた、『ハズレ迷宮』なんて呼ばれ方もする。
僕は、その西の崖のハズレでプラムに出会い、不思議な塔を見つけて前世を思い出した。
僕の前世は、かつて錬金術で栄えた古王国の『製薬スライム』だ。
そんな僕が今世で得たスキルは【製薬】と【友誼】。

冒険者ギルドで鑑定してもらった時に判明した、スキルの内容はこんな感じ。

スキル【製薬】
一級：望む薬を完璧に生成できます
スキル効果：《調合良》《時短》《素材解》《レシピ解》《高品質》

スキル【友誼】
四級：心を通わせた魔物をテイムできます
スキル効果：《スライム》《以心伝心》

【製薬】はかつて製薬スライムだった僕が持っていた能力だと思う。
これは短時間で高品質の薬が作れたり、目の前にある薬を《素材解》と《レシピ解》で分析して完璧に作れたりするスキルだ。
今はスキルが進化して、新たな薬を創り出せる【創薬】になったけどね。
【創薬】になってからはまだ鑑定していないから、級位やスキル効果がどうなっているかは分からない。
僕の感覚では、スキル効果はそのまま引き継いでいる気がする。だけど級位は五級に下がっているかも？

スキルのレベルは一級から五級まであって、一番低いのが五級で最高が一級だ。
そのうち冒険者ギルドで鑑定してもらおうと思う。今、冒険者ギルドは忙しいみたいだから、落ち着いた頃にやってもらえたらいいや。
もう一つのスキル、【友誼】は……これもやっぱり前世の影響かな。
「プラムやロペルと友達になったし、スキル効果のところに《スライム》ってあったから、スライム限定でテイムできるってことだよね、きっと」
【友誼】のスキル効果である《以心伝心》も面白い。
最初はプラムの言ってることがなんとなく分かるだけだったけど、今はプラムの『声』が、心を通じて聞こえてくる。
会話もできるし、まさに以心伝心だ。
これまでプラムと一緒に迷宮を探索したり、キラキラポーションを作ったり、ハズレの塔で僕を襲ってきた、バスチア魔法薬店の若旦那さんを撃退したり。いろいろやったから【友誼】の級位が上がったのかも。
あ、キラキラポーションは、初級よりは高価で、中級よりは安価なポーションだ。
初級よりは効果が高く、それほど値段が高くないので、駆け出しや中堅の冒険者からの人気が高い。
それと、バスチア魔法薬店の薬師親子は捕縛され、僕とはきっちり縁が切れた。
とはいえ不思議な縁で、建物のほうは僕のお店……というか、厳密に言うと今はまだ僕の師匠の

お店なんだけど、いつか一人前になった時は僕のものになると決まった。
「ん？　お店と新しい師匠ができたのは、実は若旦那さんたちの悪事のおかげ……？」
散々巻き込まれたけど、今となっては全てが丸く収まるどころか、大きな丸になって幸運ごと転がり込んできたようで、よかったとしか言えない。
「縁って不思議だよね……よっ、と」
僕は建物の隙間を流れる用水路を飛び越え、少し近道をする。
だって朝のパン屋さんは混むからね！
遅くなると売り切れてしまう。
前まではバスチア魔法薬店の名前で毎朝取り置きをお願いしていた。僕はそれを受け取るだけだったけど、今は違う。
「これからも買いに来ますって伝えないとね」
僕がほぼ毎日、このくらいのパンを買っていくんだなって覚えてもらわなくっちゃ！
買うのは僕、プラム、ロペル、それにケットシーのククルルくんの四人（？）分だけで、数が少ないから取り置きなんてしてもらえない。
そもそも、僕は素材採取で迷宮に泊まることもあるかもしれないから、取り置きはできない。
「あ、一度くらいみんなも連れて買いに来たほうがいいかな？　プラムやククルルくんが買いに行くこともあるかもしれないから、顔を覚えてもらわないと」
ロペルは僕に変化できるから、その必要はないかな。

そろそろ通称『朝食通り』だ。
街を貫くこの大通りの正式名称は『迷宮大路』。ここ迷宮都市で一番古くて一番長い通りだ。
長すぎる迷宮大路には、朝食通りのようにあちこちに通称が付いてるんだ。
この街の中心部には迷宮城があって、そこから領主の城までのエリアが一番古い。
古い城壁の名残がある中心部は放射状だが、人が増えるたびに二重、三重と壁が増え、それに沿って拡張された街は、迷路のようになっている。
「わ、パン屋さんすごい列！」
これはもっと早く出てくるべきだった。
「あ、そっか。街の住人だけじゃなくって、素泊まり宿に泊まる旅人とか、これから迷宮に行く冒険者も並んでるんだ」
失敗した～！　と、僕は急いで列に並ぶ。
この辺りは食堂を兼ねている宿屋が多いけど、それと同じくらい、食事は出さない素泊まり宿もたくさんある。
そこに泊まった者が向かうのは、この先にある『朝食屋台市』だ。僕も大好き！
「うーん。屋台市のほうも混んでるっぽいな」
僕は並ぶ列から顔を出し、大通りをぐるりと見渡した。
今日は本当に人が多い。
城門の方面から歩いてくるのは、昨晩遅くに到着し、城門前に停めた馬車で夜を明かした旅人や

商人、冒険者たちだ。
その人たちが一斉に街へとなだれ込んできている。
冒険者が多いラブリュスは夜中も城門を閉め切らないけど、街の住人以外は壁外で夜を明かすことが多いんだって。
夜中に街へ入ったとしても宿はとっくに閉まり、人気のない道端で眠るしかない。
隊商を引き連れた商人も同じくだ。取引先が閉まっていれば馬車を停める場所がない。
それなら衛兵が多くいる門の近くで野宿するほうが、下手に街へ入るよりも安全を確保できるそうだ。
疲れ切った顔の者、意気揚々と大股で歩く者、「腹減った～！」と言いながら走る者もいる。あれは、もしかしたら朝食屋台市の評判を聞いてきた食いしん坊かもしれない。
「冒険者が増えてるって本当なんだなぁ」
冒険者っぽくない人たちも、たぶん迷宮や冒険者に関連した職業の人だろう。
なぜって、ここは街の中心部に近い場所だ。
迷宮城や冒険者ギルド、領主の城に用がなければ、朝食はもっと街の外側の、混んでいない場所で済ませたっていいからね。
十二年に一度、迷宮城に異変が起こる『十二迷刻』を控えた今の時期は冒険者が増える。
十二迷刻で起こる異変は、魔素が濃くなったり、逆に薄くなる場所もあったり、迷宮の内部が組み変わる。

すると魔素濃度により出現する魔物が変わり、採取できる魔物由来の素材や、自然素材も変化する。これまでは迷宮城の深層部まで行かなければ採取できなかったものが、浅層部で採取できるようになる。到達するのに十日かかっていた階層が、往復二日で済むかもしれない。安上がりだ。
そりゃ、腕に覚えがある冒険者が国中から集まるのも納得だ。
だけど迷宮は利益だけをくれるほど優しくはない。
魔素が濃くなって魔物が増えたり、強力な魔物が出現したり、他にも予想外のことが起きたりもする。
それでも一攫千金や一気に名声を得られるかもしれない『十二迷刻』は、冒険者にとって魅力的なんだろうね。
それと、迷宮遺物が発見される率も上がるらしい！
ククルルくんみたいに古王国の遺物を趣味で収集する人、売ってお金にしたい冒険者、遺物を取り扱う商人、研究者……本当にいろいろな人が集まってくる。
人が増えれば物も多く必要になる。だからこうして街に集まる人を目当てにした商売人まで増える。
だけど安くてもいい物でなければ淘汰されてしまう。
お客が多くても、ライバルも多いからね。
僕もお店をやるんだから、よく考えなくっちゃ。
まずは冒険者ギルドで評判になったキラキラポーションを売るつもりだけど……

「他にも何かあったほうがいいかなぁ……？」
僕は香ばしいパンの匂いを嗅ぎながら、店のことを考えていた。

◆　◆　◆

「ただいまー！　遅くなってごめん！」
大きなバゲットを抱え、僕は階段を駆け上がる。
『あ、ロイ！　おそかったね～』
プラムがポヨンポヨンと階段の踊り場で飛び跳ねる。どうやら小窓に飾った花籠に水をあげてくれていたようだ。
「ごはんにしよ、プラム」
『はーい』
プラムは手（？）を上げ、嬉しそうにプルルルン！　とゆらゆら踊る。
スライムは雑食だ。彼らは大抵【分解】のスキルを持っているので、ゴミや残飯を処理する目的で飼育されることがある。
だけど僕は、プラムには好きなものを食べてほしいと思ってる。
前世のぼくは、飢えることはなかったけど、食べたいものを美味しく食べていたわけじゃない。
だから僕の手が届く範囲――【友誼】を結んだスライムたちには、美味しいものを食べ、楽しく生きてほしいと思うんだ。僕の自己満足だけどね。
『プルン？』
どうしたの？　とプラムが僕の肩に飛び乗り、首（？）を傾げた。
前世のことを思い浮かべたからか、寂しい気持ちが《以心伝心》で伝わってしまったようだ。
「なんでもないよ。ロペルはまだキッチンかな？　ロペル、お待た……わぁ！　すごい！」
『ごちそう！』
ビョン、ビョン！　と、プラムが大きく伸び縮みした。
食卓にはこんがり焼けたソーセージが山盛りになっていた。どのくらいの量かといえば、大皿三つに山盛り。
大容量の氷冷庫に浮かれた僕が、どっさり買い溜めしたもの全てだと思う。
「ロイ、おかえり。ソーセージやけたよ」
「う、うん……ちょっと多いけど、ありがとうロペル」
「これ、ちょっとおおかった……？」
僕の言葉にロペルが首を傾げる。
そうだった。ロペルは器用にいろいろこなすけど、それはドッペルスライムが持つ、人の姿や行動を真似る特性によるもの。
今はまだ、物事を理解して行動しているわけじゃないんだった。
「うん。多いけど大丈夫！　ベアトリスさんが錬金術で保管庫を作ってくれたから！」

国一番の錬金術師で僕の師匠であるベアトリスさんが作ってくれた、この『保管庫』はすごい。
倉庫の一室丸ごとに【状態保存】の効果が付与されているんだ！
この倉庫の中は時が止まっていて、新鮮なものは新鮮なまま、ちょうどよく熟成されたものも、その状態を保つことができる。
だから『時止めの保管庫』なんて呼ばれる。
【状態保存】は珍しい魔法効果ではないけど、ここまで大きな空間に付与することはなかなかない。
よくあるのは小箱や袋、金庫などだ。
僕には高価で手が届かないけど、見た目よりも大容量のアイテムをしまうことができる収納バッグに【状態保存】を付与したものもある。
こんなすごい倉庫、もし製作を依頼したら、金貨どころか白金貨が何枚も必要になると思う。
だというのにベアトリスさんは、「弟子になったお祝いよぉ」と言って、ぽーんと僕に贈ってくれたのだ。
さすが国一番の錬金術師さんだ。
「あれ？　そういえば【状態保存】って匂いはどうなるんだろう……状態が保存されるんだから匂いだってそのままか」
ちゃんと密閉しないと、倉庫がソーセージのいい匂いになってしまう。
素材や作った薬を保存するために作ってくれた倉庫に、最初に入れるのが食材ってだけでもちょっと申し訳ないのに、いい匂いまでさせてたら師匠に怒られそうだ。ふふふ。

『え？　これしまっちゃうの？　ぼくいっぱいたべたいなー』
テーブルに飛び乗ったプラムはソーセージの周りをクルクル踊るように歩いて言う。
「ロイ。おおかったぶん、あとでおしえて？　おおくないぶんは、ロイとプラムとククルルとたべたい」
ロペルはそんなプラムを見つめ、真剣な顔でそう言った。
「うん、パンも冷めちゃうし早く食べよ……っていうか、あれ？　ククルルくんはどこ？」
部屋を見回すが、テーブルの下にも戸棚の陰にもククルルくんの姿はない。
まさか、まだ寝てる……？
そう思い階段をひょっこり覗くと、上から、トコン、トトン、と小さな音が聞こえてきた。
ここで暮らし始めて数日。
そろそろ聞き慣れてきた足音だ。
「ククルルくーん！　朝ごはんだよ」
「ンー……眠いのにゃ……でもいい匂いなのにゃ……んにゃ！　山盛りソーセージにゃ！」
「おはよう、ククルルくん」
これも毎朝のこと。
ククルルくんの目を覚ますには、美味しそうな匂いがよく効く。
「おはようにゃ！　朝ごはんにゃね！　起きてよかったにゃー」
ククルルくんがトンタタ、タッタと寝ぼけたリズムで床を踏み鳴らす。

「ふふっ。ククルルくんは仕方ないなぁ」
『ポヨヨン！』
ほんとにね！　とプラムも笑い、現金なククルルくんに『テーブルのよういをてつだって』と言って、フォークとスプーンを渡している。
「はいにゃ！　ククルルもお手伝いするにゃ」
早く食事にありつきたいククルルくんは、手際よくカトラリーを並べていく。
「ロイ、ぼくはなにする？」
「じゃあロペルはパンを切ってくれる？　昨日教えたの覚えてる？」
「うん。まかせて」
頷くロペルにまだ温かいパンを渡したら、僕はスープをよそう。
一昨日の朝に教えた通り、ロペルは食器の用意をしてくれたようだ。とっても覚えがよくて優しい子だなぁと思う。
今日のスープは野菜たっぷりのミネストローネだ。
お昼はこれにパスタを入れて食べようかな？
僕はそんなことを考えながら、まだ買い揃えていないせいで深さがまちまちの皿に、スープをよそっていく。
「ロイ、ロイ、パセリを散らすにゃ。パラにゃら～」
てててっと駆け寄ってきたククルルくんが、プランターから摘んできたパセリを手でちぎる。

赤いミネストローネに鮮やかな緑色が浮かび、さらに食欲をそそる色合いになった。
「さあ、食べよう！」
「ロイ、まって」
ロペルが僕の袖をつんと引いた。
「へんげやめる。もとにもどってたべる」
「うん」
やっぱり食事の時は、本来の姿でリラックスして食べたいのだろう。
僕とロペルは向かい合い、目と目を合わせる。
すると、僕と鏡映しのようだったロペルの輪郭がゆるゆると溶けていき、元のスライムの姿に戻った。
ロペルはぐぐーっと伸びをすると、『ぷるんっ』と体を揺らし、のんびり椅子を引いた。
僕、プラム、ロペル、ククルルくん。四人（？）揃って食卓に着く。
パンとスープとソーセージのシンプルな朝食だけど、塗ったバターが溶ける温かいパンも、具だくさんのスープも、山盛りソーセージも、どれも美味しくて頬が緩んじゃう。
尽きないソーセージのおかげで、今日は特におなかいっぱいになりそうだしね！
「ふふ！　美味しいね」
『プルルン！』
そうだね！　とプラムが嬉しそうに揺れ、大きな体でちょこんと座るロペルも頷く。

ククルルくんは「うみゃい、おいしいにゃ」と言いながら爆食いだ。
――本当に、いい朝だなぁ
今、一緒に暮らしているのはこの四人（？）だ。
でもハーフエルフの女の子、リディもここに住みたいって言ってた。
ベアトリスさんは気が向いた時に突然来るし、ここに来てまだ数日だけど、そのうちもっと賑やかな食卓になるかもしれない。
冒険者ギルド長のギュスターヴさんは初日以降まだ来てないけど、ギルドのみんなも来たいって言ってたし、今度パーティーを開いて招待するのもいいかも！
僕はそんなことを思いつつ、唇をテカらせているだろうバターをペロリと舐め、にんまりと笑った。

◆◆◆

カーン、カーン……と響いてくるのは、時計台の鐘の音だ。
そろそろ本格的に街が動き出す時刻。
食事を終えた僕らの最初の仕事は後片付けだ。
汚れた食器を綺麗（きれい）にする役割はプラムが買って出てくれた。
スライムには【分解】のスキルがあるから、汚れを落とすのは得意なんだよね。
ククルルくんは器用に食器棚を登り、食器をしまってくれている。

「寝坊して朝ごはんの準備を手伝えにゃかったから、片付けは頑張るにゃ」と、尻尾を立てて言っていた。
そして僕はというと、ロペルと一緒にソーセージを収納庫にしまって、今は一足先にソファーで食後のお茶をいただいてます。
それにしても、プラム……本当に不思議で綺麗な色になったよね。
僕はプラムの後ろ姿を見つめた。
両手（？）を伸ばし、抱えるようにお皿を体内に取り込んでは綺麗にして取り出す。
そんなふうに動くたび、プラムの体内にある星屑のようなキラキラが、ちらちら動いてとっても綺麗だ。
元は薄紫色だったプラムだけど、今は明るい紫と蒼色が混ざった不思議な色をしている。
薬を使ったあの時は、こんなふうにプラムが変化するなんて思わなかった。
――あの時。ハズレの塔で僕とプラムが若旦那さんに襲われた時。
若旦那さんから攻撃を受けたプラムを治したい！　その一心で、僕はエリクサーを創造し、プラムの傷に振り掛けた。
でも、あの薬はエリクサーじゃなかったみたいなんだよね。プラムが治ったからなんでもいいんだけど……
僕の進化したスキル【創薬】は、明確に願うことが必要なのだと、先日ここを訪れたベアトリスさんの話を聞いて分かったんだ。

◆◆◆

「――ぼくが作ったエリクサーを調べてみたのぉ」
そう言って、ベアトリスさんは小瓶に入った輝く液体を取り出して見せた。
ベアトリスさんはビーカーに僅かに残っていた薬を持ち帰り、あれが本当にエリクサーなのか調べたのだという。
「それとねぇ、伝説の万能薬エリクサーについても改めて調べ直したのよぉ」
「エリクサーについて……？」
伝説上のエリクサーは、なんでも治す万能薬と言われているけど、ベアトリスさんいわく、基本的に『体力と魔力を同時に回復させる薬』なのだそうだ。
体力と魔力を同時に回復させる薬に、様々な効果が出る素材を組み合わせることで万能薬になる。
ベアトリスさんをはじめとした、現在の錬金術師たちはそう結論づけ、研究しているらしい。
ちなみに魔法薬には、体力と魔力両方を同時に回復させるものは存在しない。
「スキル【創薬】は未知のスキルだわぁ。あの子を助けたいと願い、ぼくがイメージしたのは伝説の万能薬、エリクサーだったのよね？」
「はい。あの時、プラムは心臓ともいえる核を傷つけられて……ポーションじゃ助からないと思ったんです」

核は魔物にとって命の源とも言える、魔力を生み出す器官。人は持っていない魔物特有のものでもある。
「私が調べた結果、この液体はスライムに特化した上級回復ポーションだと思うわぁ。でもただのポーションじゃない。魔力も回復……というか、補給と言ったほうが正確ねぇ？　エリクサーではないけど、効果は限りなくエリクサーに近いものよぉ」
「エリクサーじゃなかったんだ……」
【創薬】スキルは、望む薬をなんでも創り出せるものだと思っていたけど、そうじゃなかったのか。
あの時、薬の材料として使ったのは、古王国のレシピで作った薬玉――【製薬】スキルにより生成された薬が薄い膜で包まれたもの――と、プラムが塔で見つけた蒼色の結晶だった。
どちらも高魔力のアイテムだから、伝説のエリクサーができても不思議じゃないって感じたんだけど……
「ふふ。そんながっかりした顔をしないのよぉ？　確かに伝説の万能薬、エリクサーではなかったけど、あの時のプラムにとってはエリクサーだったわぁ。だって、スライムに特化した上級回復ポーションだったのだものぉ。ほらこれ、いろいろ実験したのよぉ？」
そう言ってベアトリスさんはノートを見せてくれた。
様々な人種や魔物に、僕の薬を一滴ずつ試した結果が記されたものだ。
「不思議ねぇ？　なぜスライムに特化した薬になったのか……ぼくはよっぽどスライムに縁があるのねぇ」

「えへへ……それは、はい。切っても切れないくらい強い縁があるんだと思います」
僕は首から下げた守り袋をギュッと握った。袋の中には、捨て子の僕が唯一持っていた翠色の結晶が入っている。
エリクサーの材料にした蒼色の結晶……たぶんあれは、かつて塔にいたスライムたちの魔力が結晶化したものなんだと思う。
守り袋に入っている結晶とよく似ていたけど……これが何かは、まだ分かっていない。
「それにあの子、色だけじゃなく魔力も変化してるわねぇ。魔力が高まってる。進化してるっぽいわぁ。スライム特化のポーションというのが、進化にも繋がったのかしらねぇ。興味深い現象よぉ」
ベアトリスさんはそう声を弾ませていた。
「あの……プラムで実験はしないでくださいね？」
僕は恐る恐るそう言った。
弟子入りしていたバスチア魔法薬店では、お願いをしたとしても聞き入れてはもらえなかった。
でも、ベアトリスさんは高名な錬金術師だ。
「やぁねぇ！　実験なんかしないわぁ。プラムはぼくの大切な友人じゃない。そぅねぇ……観察はさせてもらいたいけど、プラムに聞いてくれるぅ？　ぼく？」
「はい。聞いてみます」
ふふふと笑い、冗談交じりに言うベアトリスさんに僕も笑顔で答えた。
よかった。やっぱり僕の新しい師匠は、あんな人たちとは全然違う。

最初の師匠だった、バスチアの先代さんに教わっていた時と同じく、僕はきっとまた楽しく調合と向き合えそうな気がする。
「それと、【創薬】スキルにも鑑定と検証が必要ねぇ。たぶんぼくの願いが、創られた薬に影響するんだと思うわぁ。ねーえ？　ぼく、あの時なんて願ったのかしらぁ。プラムを助けたいと思っただけだったのぉ？」
「……確か、本物じゃなくてもいい、伝説の回復薬、エリクサーのような、なんでも治る薬を創りたい！　プラムを治す薬を作りたい！　って思っていたんだと思います」
そうだ。僕はプラムに死なないでほしかっただけ。僕ともっと一緒にいてほしいと思っただけ。プラムに痛い思いをしないでほしかっただけだ。
「ベアトリスさん。僕は、プラムの傷が治って、強くなってほしいって願ったのかもしれません」
「ああ、なるほどねぇ」
ベアトリスさんは珊瑚色の唇を優しくにこりとさせて、僕の頭をぽんぽんと撫でた。
「ふふ。プラムにあれほどの魔力があれば、きっともう滅多なことでは傷つかないわぁ。お友達とはいえあの子は従魔でしょぉ？　ふふ、今度は主人のぼくを守れるくらい、強いスライムになっているかもしれないわねぇ？」
クスクスとベアトリスさんは笑った。
そこへ、ポヨン、ポヨンと階段を下りてきたプラムが顔を出した。
『ロイ？　どうしたの？　へんなかお～？』

そんな声が聞こえ、プラムはポヨヨン！　と僕の肩に飛び乗り、顔を覗き込んだ。
「あ……」
鮮やかな紫色に蒼色が混じり、キラキラ輝く魔力を揺らすプラムの姿には、まだ慣れない。
「ねえ……プラム？　新しい体の色と魔力には慣れた？　気に入ってる？」
『ポヨ？』
プラムは体を捩り、ビョンビョンと伸びたり跳ねたりして自分の体を見回した。
『きれいだね』
くふふ、と楽しそうな笑い声まで聞こえて、僕もフッと笑みがこぼれた。
僕の願いでプラムの体の色やその魔力まで変えてしまったけど、プラムが嫌じゃなくて、元気にしてくれてるならいいかな。そう思った。

◆　◆　◆

――僕はキッチンで体をキラキラ輝かせ、せかせかと動き回るプラムを笑顔で眺める。
すると、お皿をしまい終えたククルルくんが振り向き、にやっと笑ったかと思ったら、トーン！と壁を蹴り、こちらに飛んできた。
「うっわぁ！　ククルルくん何!?」
「にゃあにゃあ、ロイ！　そんでお店はいつから始めるにゃ？」

ククルルくんは僕の膝の上で、若草色の目をまん丸にして「ククルル、お店屋さんやってみたいにゃ！」と言い出した。
『おみせばん、ぼくもやる』
隣に座るロペルも、ククルルくんと同じように僕をじっと見つめ、『やくにたつよ』と言い、大きく頷く。
「うん。僕も早くお店を始めたいのはやまやまなんだけど、明後日までは冒険者ギルドの売店をやる約束なんだ」
今は冒険者ギルド内で僕が作ったキラキラポーションを売らせてもらっていて、これがなかなか好評なのだ。
「んにゃ～、待ちきれないにゃ～」
『ぼくはまてるよ』
苛立たしげに尻尾を、ぶぅん、ぶぅん、と揺らすククルルくん。
ロペルは落ち着いている。
『ポヨン、ポヨポヨン！』
「んにゃ！　ククルルの頭に乗っちゃいやにゃよ、プラム！」
後片付けを終えたプラムまで駆け寄ってきて、大きくないソファーは満員だ。
「ふふ。お店のことはギュスターヴさんとベアトリスさんにも相談してるんだ。ギルドの売店と、お店を構えるのはちょっと違うからね」

「にゃー、それは確かににゃ。仕方にゃい。ククルル明日はまだ読んでにゃい『古王国のよく分からにゃい古文書』を解読して待ってるにゃ」
ククルルくんは、大好きな古文書を集めながら旅するケットシーだもんね。
『ぼくはロイのおてつだい……？』
ロペルが僕を見ながら言う。
「うーん……」
きっと売店は大忙しだろうけど、キラキラポーションの在庫が限られてるし、プラムと僕とでなんとかなりそうなんだよなぁ。
それに……
僕はチラリと、膝の上でコロンコロンしてバランスを取る遊びを始めたククルルくんを見た。
今の今まで古文書の話をしていたのに、もう他のことに気が移っている。
うーん……この気まぐれなククルルくんを、ここに一人で置いていくのは不安すぎる。何をしでかすか分からないぞ。
「……ロペルはククルルくんとお留守番しててくれるかな？　ロペルにお願いしたい仕事があるんだ」
『わかった。おしごとがんばる』
ロペルは嬉しそうにぷるぷると揺れ、大きく頷いた。
ありがとう、ロペル……！

ロペルには素材の在庫チェックとか、ポーション瓶の管理とかいろいろお願いしたいことがある。
その仕事をしつつ、ククルルくんと一緒に留守番をしてもらえればそれでいい！

◆◆◆

翌日。僕はプラムと二人で冒険者ギルドにいた。
「キラキラポーションは一人二つまで！　売店は明日までですー！」
『ポヨ！　ポヨヨン！』
僕は声を張り上げ、列を整理する。
売店カウンターには、『一人二つまで』『近日、錬金薬師ロイの店が開店予定』と書いた板を立てかけてある。
実は昨日までは買い溜めしたい人もいるだろうと、購入の個数制限は五個だった。
けど僕の新しいお店の開店日が近日と曖昧なせいか、予想以上に買い溜めする人が多く、明日まで在庫をもたせるため、急遽、二個までに制限を変えた。
「並んでる間にお金を用意してね！　どんどん進んであの箱に代金を入れてくださいー！」
僕が指さす先にあるのは透明の料金箱。
この箱に使われている透明の板は、ある植物から採れる粘液を固めたものだ。硝子よりもお手頃価格なので最近人気だ。

並ぶお客さんたちは、自分の番が来たらカウンターに置かれた箱に代金を入れ、プラムからポーションを受け取る。
箱が透明なので金額をごまかせばすぐに分かってしまう。
ここに並ぶお客さん皆が証人だ。
プラムは売店カウンターに立ち、シュッ、シュッと手（？）を伸ばしポーションを手渡していく。
このやり方にしてから、回転率がかなり上がった。
流れ作業のような販売方法は、列が高速ではけていく。
すごい。お客のみんなもこのやり方に慣れたせいか、あっという間に完売しちゃいそう……！

そしてお昼過ぎ。
ランチを食べに来た冒険者たちが買っていって、今日の分は完売した。
「お、静かになったと思ったらもう売り切れたか」
ランチのトレイを持って二階から下りてきたのはギュスターヴさんだ。きっと忙しくて仕事をしながらごはんを食べてたんだ。
「うん、今日リディが素材を持ってきてくれる予定だから、明日はもっと多く用意するつもり」
「そうか。じゃ、そう書いた紙をカウンターと掲示板に貼っておけ。受付のエリサに渡せばいい。ああそれと、夕方、迷宮から戻ってがっかりする奴らもいるだろう。明日なら買えそうだって教えてやってくれ」

ギュスターヴさんは僕にそう言う。
「はい！」
「ところでロイ。お前、ベアトリスに前世のことを話したか？」
ギュスターヴさんがちょっと屈(かが)んで僕の耳元で尋(たず)ねた。
「え、まだ……です」
師匠になったといっても、ベアトリスさんは毎日指導をしに来てくれるわけじゃない。
引っ越しでバタバタしてたのもあるけど、どんなふうに指導してくれるのかもまだ教えてもらっていない。
「まあ、どう話すか考えるとこではあるな……よし。早いうちにベアトリスと話す機会を作ってやろう。師匠にはお前のスキルや前世のことを話しておいたほうがいい」
僕は肩に乗せたプラムと顔を見合わせ、ほんの少し眉を下げる。
「心配するな、ロイ。ベアトリスならお前のちょっと変わった前世くらい、面白がって受け入れる。古王国時代の製薬スライムなんて錬金術師には垂涎物(すいぜんもの)じゃねぇか？　むしろ実験されないように気を付けたほうがいいかもな」
ギュスターヴさんはニッと笑い、僕の頬にぺちりと触れた。
「……そういえば前にもギュスターヴさん、そんなこと言ってたね。ふふ！」
僕の肩では、プラムが『じっけん……？　ぼく、せいやくすらいむ……だとおもうんだけど……』と呟き、プルルルと激しく揺れていた。

大丈夫！　もしベアトリスさんが実験したがっても僕が守るからね！

◆◆◆

ロイが冒険者ギルドでの商売を終え、店に向かっている頃。
ベアトリスは様子を見にロイの店を訪れ、そこへリディも素材を持ち、訪問していた。
「ベアトおねーさんとリディ、ククルルはちょっとお仕事があるから二人で待っててにゃ！」
『おちゃどうぞ。ぼくもおそうじのつづきしてくる』
そう言って、ククルルとロペルは二人を応接室に残した。
「まぁまぁ。子猫ちゃんも頑張ってるみたいねぇ」
「……」
ベアトリスは朗(ほが)らかに笑い、ロペルの淹(い)れた少々苦いお茶を飲む。
だが、リディは緊張した面持(おもも)ちで背筋を伸ばし、ソファーに座っていた。
「あの、ベアトリス様」
その声掛けに、ベアトリスはおや？　と思った。
これまでリディは『ベアトリスさん』と、街のみんなと同じように呼んでいたはずだが……
「なぁに？　リディちゃん」
「あの、私、侍女(じじょ)からあなた様のことを聞きました。母と友人同士だったと……その、ご挨拶が遅

くなり、申し訳ございません！」
リディはスッと立ち上がり、淑女の礼をとった。
「あら。ふふっ、いいのよぉ。大きくなったわねぇ……リディアーヌ・アドリアネー・ラブリュストラ」
ラブリュストラ。それは、ここラブリュスで知らない者はいない名。
領主である、迷宮伯ラブリュストラ家の名だ。
「いいえ。離れにいる私のことなど、ベアトリス様はご存知ないと勝手に思い、その……気軽にベアトリスさんだなんて、失礼いたしました……」
リディは深々と頭を下げる。
ベアトリスは、リディの明るい金の髪色に懐かしい気持ちで目を細め、少ししょげた尖った耳を見て、微笑んだ。
「そんなこと、気にしなくていいのよ。あなたは城に出入りしていなかったんだものぉ。それより座って？　あなたのお顔をよく見たいわぁ」
柔らかなその声に、リディはそろりと顔を上げる。
「うふふ。もしもここが宮廷で、私は錬金術師の正装、あなたがドレスをまとっていたら、かしこまるべきかもしれないわぁ。でも出会ったのは迷宮都市の街中で、あなたは駆け出し冒険者でしょう？　気にしないわぁ」
「ベアトリス様……」

「やぁね、これまで通りでいいのよぉ？　あなたは弟子のお友達だし、私が知り合ったのは冒険者のリディちゃんだもの。ところで……その赤いケープっておうちにあったものじゃなぁい？」
思わぬことを言われ、リディは目をパチパチと瞬かせた。
「はい。これは母のものだったようで……冒険者になると言ったら侍女が仕立て直してくれたんです。冒険者だなんて、最初は渋っていたんですけど……」
「あはは、でしょうねぇ」
「あの……ベアトリスさ……ん、は、母とどんな関係だったのですか？」
「私がラブリュストラ家の子に、魔法の授業をすることがあるのを知ってるかしらぁ」
リディは頷く。
だからこそ、リディは離れに閉じ込められる生活をしていても、高名な錬金術師ベアトリスのことを知っていたのだ。
だが、知っていたのはそれだけだ。
「あなたのお母様――アデリーヌとは、わりと古いお友達なの。あなたの侍女って、元はお母様の侍女でしょぉ？　それにね、私お父様とも友人なのよぉ。四人で何度も迷宮に行ったものよ」
「友人……だったのですか」
「ええ……その赤いケープも、腰の収納バッグにも見覚えがあるわぁ。懐かしい」
ベアトリスから自然と笑みが零れる。
リディの母はエルフでベアトリスは魔人だ。

エルフは魔人ほどではないが、どちらも長命の種族。長い時を生きる者同士気が合った。
そしてリディの父親はラブリュストラ家の長男だった。
幼い彼に魔法の手ほどきをしたのはベアトリスだ。彼はベアトリスの可愛い教え子であり、長じてからは友人の恋人となった。
ベアトリスは当時の話をリディに聞かせた。
「私ね、ちっちゃなあなたに会ったことがあるのよぉ。二歳くらいだったかしらぁ？」
「えっ！」
リディは目をまん丸にして思わず声を上げた。
「大きくなったわね……あれからもう十二年が経ったのねぇ。私にはついこの前のことのようだけど、よちよち歩きの子が冒険者になっているなんて。驚いたわぁ……でも、抜け出してきているのよねぇ？」
「はい……叔父様に言い付けますか？」
リディはベアトリスの金眼を真正面から見て尋ねると、キュッと唇を引き結んだ。
ベアトリスにはその顔が、リディとよく似た懐かしい顔と重なって見えた。
こうと決めたら絶対に曲げず、自分の意志を貫き通す。
リディの表情は、そういう決意の顔だ。
この親子はよく似ているとベアトリスは思う。
友人であった彼女も十二年前に見せた顔だった。

「……知られたくないのねぇ？」
「はい。叔父様に知られれば、もっと厳しく離れに閉じ込められてしまいます」
「そうねぇ……まぁ、それにも理由はあるのでしょうけど……説明不足じゃ仕方ないわねぇ」
今、リディの心臓はドキドキ、ドキドキと跳ね回っているのだろう。
緊張からか、膝の上で重ねた手はキツく握りしめられている。
十二年前。前回の十二迷刻が起きた時。
リディの父親は次期領主、迷宮伯となる立場だった。だが十二迷刻の迷宮に挑み、想定外の何かに遭遇し、母親と共に眠りについた。
生きてはいるが、深く眠ったままでは迷宮伯の仕事はできない。
仕方なく兄の代わりを務めたのが、現在の迷宮伯。リディの過保護すぎる叔父だ。
（あの子もねぇ……やり方が下手なのよぉ）
ベアトリスは苦笑いする。
リディの叔父は、万が一にもリディを失うまい、迷宮に取られまいと大切にしているつもりなのだろうが、リディに何も話していないせいで、盛大にすれ違ってしまっている。
まさかリディが家を出たいと思い詰めた末に冒険者になり、活躍しているとは、想像だにしていないだろう。
「うふふ。言わないわぁ」
「……えっ」

ベアトリスは、またもや驚いて目を瞬かせるリディを見て笑う。
「叔父さんには言わない。あなたもよく考えたのでしょうし、あの侍女が協力しているなら私が口を挟むことではないわぁ。私はこれまで通りよぉ。あなたもそうしてくれればいいわぁ。でも、一つだけ言ってもいいかしらぁ」
リディは頷く。
その正直で子供らしい表情に、ベアトリスは頬を緩めた。
長く生きていると、正直さや素直な心根ほど美しいものはないと思ってしまう。
「お母様とは今もお友達だと思っているの。たとえ十二年間、眠りについていても変わらないわぁ。もちろん、お父様のこともよ」
「ベアトリスさん……」
じわり、とリディの瞳に涙が滲んだ。
「やぁだ、当たり前でしょう？　なかなか会いに来られなくて、いつの間にか小さかった子が冒険者になるくらいの時が流れていたけど、友人のことは忘れないわぁ」
「……ベアトリスさん。最近、父や母に会いましたか？」
そう尋ね、見つめるリディの顔を見て、ベアトリスは僅かに首を傾げた。
言葉に何か引っかかるものを感じる。
「ええ。今回街に来た時に会ったわぁ。彼女たちに会うことも目的だったんだものぉ。でも……何かあったのかしら？」

リディはゆっくりと頷く。
「数日前から、両親の眠りが深くなりすぎているそうなんです」
それは深刻だ。眠りというものは馬鹿にできない。
あまりにも深く眠ってしまえば、人間は呼吸まで止めてしまうことがある。
そうなったら、いくら長命なエルフであるリディの母もそこまでだ。
「もしかしたら、本当はもっと前からそうだったのかもしれません」
「どうしてそう思うのかしらぁ」
「……アルベールお兄様が、ずっと迷宮城にこもっているからです」
リディの声が震えている。
アルベールは領主である迷宮伯の次男で、リディとはいとこにあたる、イグニスというラブリュス一の冒険者クランのリーダーだ。
「十二迷刻前だから、鍛錬を厳しくしているのかもよぉ？　あの子ったら、リディちゃんの両親を目覚めさせたくて、迷宮探索をしてるんだものねぇ……なるほどね。ちょっと必死すぎるって思ったのねぇ？」
リディは頷く。
リディは堪えた涙が目からこぼれ落ちてしまいそうだった。
それに赤くなった耳や鼻が痛々しい。
ベアトリスは席を立つと、そっとリディを抱きしめた。

「大丈夫。お母様は諦めが悪くてしぶといのよぉ？　お父様も同じ。とにかくしつこいのよ、あの子ぉ」
ベアトリスの腕の中でリディが頷く。何度も、何度もだ。
「ベアトリスさん……私、両親を昏睡状態にした十二迷刻が嫌いです。迷宮なんか嫌い」
「そうねぇ。私も煩わしく思うわぁ」
だが、そう思っていながらリディは迷宮に潜っている。
名を上げるという目的のためと、もしかしたら……
（この子、十二迷刻の謎を解こうとしているんじゃない？　だったらアルベールくんに協力を願えばいいのにぃ）
ベアトリスはそう思ったが、すぐに思い直す。
リディが駆け出しの冒険者をしていることがバレてしまえば、今よりも厳重に離れに閉じ込められてしまう。
リディは、叔父が口出しできないくらい名を上げるまでは、内緒で冒険者としての経験を積むつもりなのだ。
（でも、アルベールくんはいい加減、リディちゃんに気付きそうよねぇ……？）
眠りが深すぎるというリディの母親たちにもう一度会いに行ってみよう。
ベアトリスは明るい金の髪を撫でながら、難儀な友人一家のことを思った。
（だけど、国一番の錬金術師と呼ばれていても、友人夫婦を目覚めさせることすらできないのよねぇ。情けないわぁ）
ベアトリスは変わったスキルを持つ弟子のような才能が、自分にもあればと思ってしまう。
願った薬を作ることができればいいのにと――

◆　◆　◆

「ただいまー」
『プルルン！』
僕とプラムは回収した使用済みポーション瓶を抱え、帰宅した。
ちなみに僕は木箱を一つ抱え、プラムは三箱を頭（？）に乗っけて歩いてきた。小さいのに力持ちで羨ましい……！
「おかえりにゃ～！　あにょね、リディが素材持ってきてくれたにゃよ！　あとベアトおねーさん来てるにゃ」
「えっ、ベアトリスさんも？」
『プルルッ』
プラムがベアトリスさんの名前にちょっと動揺して小刻みに揺れている。
大丈夫だよ、怖くない。
「んにゃ？　プラムにゃんでブルブルしてるにゃ？　くふふ！　ククルルも真似っこするにゃ」

なぜかククルルくんまでブルブル揺れ出した。だけどいつの間にかお尻をふりふりする踊りに変わってる。可愛いけど、なんで？
「ねえ、ククルルくん。リディとベアトリスさんはどこ？」
「おかえりロイ。ふたりはあっち。おみせのおうせつしつだよ」
「ロペル！　ありがとう」
お留守番を頼んでいたロペルは僕の姿に変化している。
リディやベアトリスさんが来たのなら、ロペルが二人と話せる僕の姿をしていてよかった。
僕は木箱を工房に置くと、大急ぎで二人が待つ応接室へ走った。
後ろからはまだ踊っているククルルくんとプラム、不思議そうな顔で見つめるロペルもついてきている。
「リディ、ベアトリスさんお待たせしました！　わ！　素材がたくさん！」
飛び込んだ応接室には、リディが持ってきてくれた処理済みの素材が積まれていた。
チラッと覗いてみると、『日輪草』には大きくてまん丸の蕾がついてるし、『黄金リコリス』は随分立派。それに『兎花』からはとってもいい匂いが漂ってくる。
「わぁ、質の高いものばかりだね！　深いとこまで潜ったの？　リディ」
「ううん、ロイに早く素材を届けなきゃって思ってたから、浅層部の採取地よ」
「にゃにゃ、すっごくいい匂いにゃね！　魔力の匂いもするにゃ」
ククルルくんが尻尾をピンと立て、クンクンと鼻を動かす。

「魔力の匂い……？」
「そんなのするの……？」
リディは魔力を感じることはできるが、匂いと言われて僕と一緒に首を傾げた。
プラムとロペルも『いいにおい』「こいにおい」と頷いているので、三人（？）には分かるのだろう。
プラムとロペルは魔物だし、ケットシーは妖精……魔物に近いから分かるのかなぁ？
面白い。いい素材の在処が匂いで分かったら、採取の時すごく役に立ちそうだ。
「あの、ベアトリスさんも匂い分かったりします……？」
「分からないわぁ。魔人は魔物より人に近い種族なの。エルフと近いかもしれないわぁ。さ、早く素材の取り引きをしちゃって？　今日はお店の運営について話しにきたのよぉ」
僕は頷き、リディが持ってきてくれた薬草を検分する。
これはいつも通りだからすぐに終わる。
だけど今日の素材はとっても品質がいいから、感謝でちょっと報酬を多めに渡した。
友達だけどお互い仕事だから、感謝は言葉だけじゃなく、目に見える対価でちゃんと支払わないとね！
そして次！　お待ちかねのお店の話だ！
「ベアトリスさん。僕、できるだけ早くお店を始めたいです！」
そわそわ浮き立つ気持ちは隠せない。

だって、商品さえ揃えばすぐにでもお店を開けるんだもん！
「うふふ。そうね。でもぉ、最初からたくさんの商品を扱うのは無理があるわぁ。薬師はぼく一人。お店の従業員はこの子たちだけよねぇ？　知ってるかもしれないけど、お店って意外と忙しいのよぉ？」
ベアトリスさんはお店について話し始める。
お店は商品を並べて売るだけではない。
薬を作ったり、素材や在庫商品の管理をしたりする裏方仕事がある。薬師には付きものの、標準瓶の回収と管理もある。
それらをこなした上で薬は店に並ぶのだ。
さらに接客があり、薬の説明もする。店を閉めたら片付けと掃除、売上の管理。帳簿付けもしなければならない。作業は膨大だ。
だからこそ薬師も含め、職人たちはお店の経営でつまずく人も多いという。
素材の確保、管理、商品の作成。それらは好きなことなのでキッチリできるが、お店をやるには別の能力も必要だ。
「ぼくは接客も得意よね。計算も問題ないわぁ。薬師としての部分も大丈夫そう……だからこそ心配だわぁ。しばらく私が通おうかしらぁ」
ベアトリスさんが毎日来てくれたら、それは嬉しいけど……
「あの、どうして心配なんですか？　売店の経験もあるし、ベアトリスさんから見て、僕が上手くできてたなら大丈夫かなって……」
「やあねぇ、だからこそよ。なんでもできる！　って調子に乗りそうで怖いわぁ。それで無理を重ねて体を壊したり、寝不足のまま迷宮に行ってやられたり、おかしな輩に騙されて借金を背負ったり……いろいろ心配なのよ」
「え、僕ってそんなに危なっかしいですか？」
みんなどう思う？　と視線を送る。
ククルルくんは……いつの間にかベアトリスさんの膝枕で寝てるなぁ。
『プルル、プルン』
大きく頷くプラムは『がんばりすぎそう』、ロペルは真顔で「だまされそうでしんぱい。ロイはいいひとすぎる」と言う。
「ロイは売店だって無理してるでしょう？　欲しがるお客さんがいるからって、毎日遅くまでポーションを作っていて、私もちょっと心配」
「でもそれは……稼げる時に稼いでおかないとって思って……」
さすがリディには筒抜けだ。だって僕が作る大量のキラキラポーションの素材は、ほとんどリディが持ち込んだものだからね。
お願いする量をどんどん増やしていたから、僕もリディに無理させていないか心配してたんだけど……お互い様だったみたいだ。
「あらあらぁ。ぼくの危うさがさらに分かったわぁ」

ベアトリスさんは眉尻を下げ、苦笑する。
「師匠として助言するわぁ。まずは今の売店と同じく、キラキラポーション専門店にするのがいいと思うの。それに、ぼくの薬を欲しがる人ってキラキラポーションが欲しい人よねぇ？」
確かにそうだ。僕の薬師としての評判は、普通のポーションとはちょっと違うキラキラポーションを作れるってことだ。
他の薬は売店で扱ってないから、ベアトリスさんが言っていることは当然だけど、でも――
「僕、いろいろな薬も作ってみたいです……！」
そして綺麗になったお店の棚にずらりと並べたい！　だって、夢の開店だ！
ラベルとか製作者のタグとか、僕オリジナルのものを作りたいし、お客さんから注文を受けて、その人に合う薬を作ることもしたい。
そんなふうに思っていたら、肩の上で話を聞いていたプラムがニュッと手（？）を伸ばし、僕のおでこをペチリと叩いた。
「あいてっ」
にゅるんと体を傾け、『もう、むちゃなことかんがえてるでしょ？』とそんな声が聞こえてきた。
「う……で、でも無茶ではないよ……？　いいお店にしたいなって思っただけで……」
しどろもどろになっていると、僕とプラムの会話は分からないが、大体想像がついたのだろう。
ベアトリスさんは苦笑し、リディはくすくすと笑う。
「ねえ、ロイ。いいお店にしたいなら、まずは今のお客さんを大切にしたら？　今ね、私たちが西

の崖のハズレで酔狂山羊（サテュロス）に遭遇したように、階層にそぐわない魔物がちらほら出てるの。だから皆、保険としてキラキラポーションを持っておきたいと思ってるのよ。できれば一つじゃなくて余分にね」
「ああ。だから今日は完売が早かったんだ」
それなら最終日の明日は、予想以上にお客さんが来るかもしれない。
「どうしよ、素材足りるかなぁ……」
明日、売店に並べるキラキラポーションのことを考え、思わず言葉が漏（も）れてしまった。
「ふふっ」
「うふふ」
リディとベアトリスさんが揃って笑った。
「え？　あの、僕おかしなことを言いました……？」
「いいえ。それでいいのよぉ」
ベアトリスさんは僕の手を取ると、そっと両手で包んだ。
「ぼくはまず、小さなこの手でできることをすべきよ。優秀な薬師であり、敏腕経営者になりたいのなら、一歩ずつ進んでいくことをお勧めするわぁ」
「あ……」
プラムもロペルも頷いている。
そっか。僕、夢だったお店ができたから、どんどん想像を膨らませちゃって、自分にできる以上

のことをやりたい、やるんだ！　って意気込みすぎてた……のかな？
じわりと頬が熱くなる。
やっと青銅級冒険者になったところなのに、いろいろな薬を作って棚一杯に並べたいだなんて、何を考えていたんだろう。浮かれてた。
「うふふ。いろいろやりたいって思うのもいいことよぉ。やる気は上達に繋がるものぉ」
ベアトリスさんはそう言って笑った。
そして、ベアトリスさんと話した結果、お店はなるべく早く開店させることに決まった。
まずはプレオープンとして、キラキラポーションだけを売る。
「でも売り物が一種類だけは寂しいわぁ。このベアトリスの弟子のお店だっていうのにがっかりでしょ？　せっかくの錬金薬師のお店だしぃ」
それはそうだ。僕がベアトリスさんの弟子になったことも、錬金薬師と名乗って看板にまでしていることも街のみんなが知っている。
僕の周辺が何かと騒がしかった――バスチア魔法薬店が潰れたり、若旦那さんに襲われたりしたのと、ベアトリスさんが目立つ存在であることから、僕もお店もちょっと注目されてるらしい。
「こうしましょうかぁ。グランドオープンまでにもう一種類、新しいキラキラポーションを作りましょ？　そうねぇ……これまでのキラキラポーションを初級としたら、中級くらいの、一段階強力なポーションがいいかもしれないわねぇ」
新しいキラキラポーション！

「あの、それって塔で見つけたノート……古王国ポーションのレシピを参考にしてみてもいいですか⁉」
「ええ。もちろんいいわぁ。だってここは錬金薬師のお店だものぉ。当然よぉ？」
ベアトリスさんが笑う。
「プレオープン期間、店番はロペルにお願いするのがいいかしらねぇ？　ああ、この子猫ちゃんもやりたがるかもしれないわぁ。お店屋さんになりたがっていたから」
「はい」
ククルルくん、お店屋さんをやりたいってベアトリスさんにも話してたんだ。ロペルも一緒なら安心かな？
「ぼくおみせばんできる。ククルルもきっとだいじょうぶ」
そう言うロペルに僕は頷く。
で、ククルルくんはというと――
「くぷー……くぷぷぷぅ……」
ククルルくんからの返事は可愛い寝息だ。
みんなからクスクスと笑いが零（こぼ）れ、プラムはククルルくんの丸い頭を撫でる。
ククルルくんもお店番、頑張ってくれるといいんだけど！
「ベアトリスさん。僕、錬金薬師の看板を偽（いつわ）りなしにしたいです！　その……もっと勉強をしたいです！　よろしくお願いします、し、師匠！」

立ち読みサンプル
はここまで

また頬が熱くなってしまった。
師匠って呼べる人がいるのは嬉しいけど、でも慣れなくてちょっと恥ずかしい。
「ふふっ！　こちらこそ。久しぶりの弟子は可愛いわぁ。そうねぇ……じゃあ、まずは錬金薬師流の迷宮の歩き方と採取から学びましょう？　新商品のレシピ作りは、たっぷり素材採取をしてきてからのお楽しみよぉ」
ベアトリスさんは珊瑚色の唇をにんまり三日月の形にして言った。

「よし。明日は売店最終日！　プラム、ロペル。リディが持ってきてくれた素材を片っ端からキラキラポーションにするよ！」
『プルルル！』
『ぽよん！』
プラムと、スライムの姿に戻ったロペルは、素材の山を前にぴょーんと飛び上がる。
プラムは素材の下拵えを手伝い、ロペルはできた薬玉を瓶に詰める。
ロペルがスライムに戻ったのはこのためだ。
手（？）がたくさんあったほうが、一気にたくさん詰められるし、箱にもしまえるからね！
「にゃっ、そんじゃククルルはお使いにいってくるにゃ～！　美味しいごはん買ってくるにゃよ～！」
ククルルくんは夕食と夜食の買い出しだ。

飽きっぽく興味のないことが苦手なククルルくんに、単純作業のポーション作りは辛い。
それにククルルくんの肩掛け鞄は、空間魔法で加工された、たくさん物が入る収納バッグだ。
どれだけ買っても、持ち帰りに困る心配がない。
だから食いしん坊なククルルくんに「みんなで食べれる美味しいごはんを買ってきてくれる？」とお願いした。
朝のスープは残ってるけど、他に何か作ったり、買ってきたりする余裕が僕にはない。
それなら得意な子に頼めばいい！
「よろしくね！　ククルルくん」
「はいにゃ～！」
トッタタ、トッタタ。踊るような足取りで尻尾をぶんぶん振りつつ、ククルルくんはいつものように扉をバーン！　と開けて、飛び出していった。
「どうしていつもバーン！　って開けるんだろうね……」
『さあ？』
『さあね？』
プラムとロペルも大きく首（？）を傾けて、ククルルくんを見送った。

◆
◆
◆